



全国中学生空手道選手権大会出場

男子団体組手

佐沼中(写真左から、千枝紘(2年)・武川史弥(3年)・安達蒼真(3年)・渡邊翔(3年)・武川力(3年)・武川史穂(2年))

男子個人組手 千枝紘

「夢は引き継がれる」

「目指すは全中8強」と話す選手たちは、和道会はさまに所属し、小学生時代から切磋琢磨してきた仲間だ。団体の県予選は、準決勝まで快勝。全中出場を決め、勢いに乗る選手たちは、決勝で強豪の東北学院中を2対1で下し優勝した。

全中で個人組手の部に出場した千枝は、リズムに乗れず初戦敗退。「団体戦では必ず勝つ」と活躍を誓った。団体戦は、相手選手に合わせてメンバーを変える作戦で臨み、3回戦まで1敗もすることなく順調に勝ち上がった。8強をかけて臨んだ4回戦。常葉大附属菊川中(静岡県)を相手に、先鋒千枝は3ポイントリードするが、隙を付かれた瞬間に大技を決められ敗戦。後がない次鋒武川は「絶対勝って次につなぐ」と気合を入れる。大将武川(史)は「必ず自分に回ってくる」と信じて待つが、焦りから武川本来の実力が発揮できずに敗戦。8強への道は閉ざされた。3年生たちは「来年こそ全中8強入りを果たしてほしい」と、夢を後輩に引き継いだ。



(左)高橋明輝 南方中3年
(右)後藤千葵

全国中学校ソフトテニス大会出場 男子個人戦

「高みを目指し有言実行」

「ここまで勝てたのは、このペアを組めたから。感謝している」と、笑顔を見せる2人。組んだ当初は呼吸が合わず、コーチに指導を仰ぎ続けた。日々の努力が実を結び、昨年の県新人戦は上位入賞。東北地域の上位入賞者が集まる「岩手カップ」では、県新人戦で敗れた相手に勝利し優勝した。自信を付けた2人は、なんでも言い合えるようになった。

中総体県大会で優勝し、全国大会進出を決めたときも「おとしの全国大会で、2回戦に進出した先輩の成績を超えたい」と前を見据えた。全国大会1回戦の相手は、開催地の広島代表。アウエーの雰囲気には押し負けず、序盤はリードを許すが、2人は冷静に相手の癖や打つコースを見極め、逆転で勝利。その勢いは衰えず2回戦も突破し、有言実行した。

今後の目標は「インターハイでベスト8以上」と強気に話す高橋。後藤も「高橋と組み、勝つ喜びを知った。県内で負けたくないくらい強くなりたい」と話す。お互いを尊重し、強い気持ちを持つ2人は、すでに次の舞台を見据えている。

夏に挑む

Zoom Up Tome 2018 Special

「悔しさ糧に飛躍誓う」

「昨年よりも落ち着いて試合に臨めた」と、2人は口をそろえる。和道会菊田道場に所属する伊藤と北浦は、昨年初めて全少に出場したが、共に初戦で敗退した。

リベンジを胸に臨んだ今年は、共に1回戦シードで2回戦から出場。伊藤は得意の突きで積極的に攻め、序盤からポイントをリードして勝利した。北浦は、引いて守る相手に対し、間合いを詰めて突きで攻め、4対0で勝利。共に全少での初勝利を手にした。続く3回戦、伊藤は同点で試合を終えたが、相手がポイントを取ったため、惜しくも敗戦。北浦は、序盤から優勢に試合を進めるが、試合終盤に守りの気持ちが出てしまい判定で敗れた。「ベスト8が目標だったので悔しいが、昨年よりは全国との力の差を感じなかった」と手応えをつかんだ伊藤。北浦は「初戦突破できたのはうれしいが、最後に弱気になってしまった」と悔しさをにじませた。2人の次の目標は全中の舞台に向かい、悔しさを糧に中学でのさらなる飛躍を心に誓った。



全日本少年少女空手道選手権大会出場

男子個人組手

(左)北浦心太 加賀野小6年
(右)伊藤大翔 登米小6年

「跳び越えた先の栄光」

県大会決勝、心拍数はいつもより少し高かったが、気持ちは落ち着いていた。ボールの反発力を使い、高さ4m00のバーを跳び越えた瞬間、会場からどよめきと歓声が上がった。後藤は、全中に出場できる標準記録を突破し優勝した。「目標だった全国のスタートラインに立つことができた。うれしさと同時に闘志が湧いた」と勝って兜の緒を締めた。

昨年出場した市中総体の記録は3m20。フォームを確認しながら基礎練習を繰り返し、自身の記録を大きく塗り替えてきた。全国大会は3m90から始まった。焦りから2回連続の失敗。バーを4m10に上げた最後の3回目、目の前の跳躍に神経を集中させた。ボールをしなせ、体を振り上げる。高さは申し分なかったが、バーは落下し天を仰いだ。「記録を出すことはできなかったが、トップレベルの選手と競えたことがいい経験になった。高校では、インターハイで優勝できる選手になりたい」。後藤はすでに次の目標を見据え、跳び越えた先の栄光をつかむため、助走を始めている。

全日本中学校陸上競技選手権大会出場 男子棒高跳び



後藤琉希 南方中3年